

きたないものとはどんなもの

ぼくは、精神科の医者でもあるが、ぼくのところに、こんな相談をしにくる人がある。手を何度も洗つても、まだよごれているような気がして、心配だというのだ。

これは不潔恐怖症という名まえがつけられていて、神経症という病気のなかにいれられている。たしかに、こうした人たちを見ると、君たちも、おかしいと思うだろう。そのような人は、また世の中のものがきたなくて、さわることができないという。たとえば、電車に乗ると、つり皮があるが、どこのだれがつかまつたものかもわからないと思うと、不潔でつかまる気になれない。学校の机なども、おなじ理由からきたないと思う。そして、きたないけれども、どうしてもさわらなければならぬときや、うつかりさわってしまうときがある。するとたいへんだ。何度も手を洗つて、自分の手についたよごれを落とそうと思う。しかし、いくら洗つても、そのよごれが完全に落ちないよう気がする。

自分でも、それが少々ばかげたことだとは思う。ほかの人たちはへいきでさわっているのだし、そんなに何度も手を洗いはしない。それでも、とくべつ病気になつたりはしない。それで、こんなばかげたことを心配する自分は、おかしいと思う。つまらない神経を使っていると思う。でも、いれとなると、そのよごれのことが気になつてしまふ。

君たちが、ばからしいと思うのも当然だ。だって、その御本人ですら、自分の心配がばかしく、理にあわないと思っているのだから。しかし、その人にいくら、心配しても意味がないよ、心配するなよといつても、神経症は、ながらない。

ところで、君たちは、そんな人たちと自分とは、まったくちがつてゐると思うだろうか。自分とは縁がないと思うだろうか。じつをいうと、そうではない。

たとえば、ぼくが、ある人のおしつこをコップにいれる。そして、それをこぼしてから、石ケンできれいにコップを洗う。ていねいに

洗つたから、もう、ほんのわずかも、おしつこはコップについていない。それはまつたくきれいなはずだ。しかし、それに水かジュースをつついで、君に飲んでごらんといつたら、どうするだろう。じつさいにはきれいなんだから、なんでもないさ」と飲めるだろうか。きっと、いやーな感じがするにちがいない。飲んだにしても、ひどくやせがまんして、むりして飲むにちがいないのだ。そのコップを、いくど洗つてみても、君はまだきれいになつていらない気がするのではないだろうか。おそらく、百ペん洗つても、君には、入つていたさいしょのおしつこが気になるにちがいない。

そうだとしたら、前に話した、あの神経質な、手を洗つても洗つても、まだよござっているような気がする人と、どこがちがうだろう。頭ではわかっているが、どうしても気がすまないというところは、そつくりではないだろうか。

君とその神経症の人たちがいは、君がおしつこをよござっていると思うだけなのに、その人は、つり革も学校の机も、おしつことおなじようにきたないと考えるところだ。ところで、おしつことはそんなにきたないものなのだろうか。ばいきんのことを考えると、人間のおしつこほど、きれいなものはない。健康な人のおしつこは、君の手などよりも、それどころか、水道の飲み水などよりも、ずっと、ばいきんが少ない。もし、君が医学を学んで、人間の病気のことを知るようになれば、そのことがすぐにわかる。だから、君は、君がばらしいことを心配しているなと思った神経症の人たち、つり革にさわれないで、さわつたら十ペん以上も石ケンで手を洗う人たちよりも、ばらしいことを心配しているといえる。

では、ぼくたちが、不潔だ、よございると感じるのが、非衛生的で健康に害があるということとちがうのなら、それはどういう意味を持つているのか。その心配のうしろ側に、衛生ともばいきんとも関係のない、けがれという考え方、無意識なものとして、ひそんでいるのである。

けがれ、それは昔の、科学的なものの見方を知らない人間の考

えた。おしつこは、きたないものではなく、けがれたものだつた。ぼくたちの祖先は、あまり肉を食べなかつたらしい。けもの、四足の動物はけがれていると思っていたからだ。女も、けがれていると思われた場合があるらしい。いまでも、女がのぼるとけがれるからといって、のぼらせない山、女人禁制の山が残つてゐる。

インドには、不可触賤民と呼ばれてさげすまれてゐる人々がいる。インドには、長いあいだ、カストと呼ばれる階級制度があつた。そのいちばん下の階級のまづしい人たちが、不可触賤民と呼ばれていた。たしかに、その人たちは貧乏で、きたならしい身なりをしていただろう。病気も多かつたかも知れない。しかし、だから、さわると危険だと昔の人が考えていたのだろうと思うのは、ばいきんを持ちだして不潔を考えているのとおなじで、意味がない。昔の人たちは、その人たちを、よごしていると考えたのではない。けがれでいると思ったのだ。けがれというのは、洗つて落ちるものではない。

けがれとは、どんなもののなのだろう。それを知るために、昔の人たちがどんな考え方をしていたかを知る必要がある。

現代に生きているぼくたちは、人間がどうして病気になるか、人間にどうして災害がふりかかるのかを、科学的につきとめようとする。まだ、ぼくたちは、その原因を完全につきとめることはできないし、知らないこともたくさんある。しかし、わからぬことを、神様のたたりだとか、自分に悪魔がついているからだなどとは考へない。

しかし、昔の人は、おそらく、そんなふうにしか考えられなかつたのだ。そのような習慣は、いまでも残つてゐる。いなかに行くと、ある家につきつぎと不幸なことが起つたとき、よくたたりだなどといわれる。そして、そのたたりを消すためには、神様におはらいをしてもらつたり、お坊さんに供養してもらつたりしなければならない。

君たちなら、たたりだなんて迷信を、と考えることができるだらうけれど、年寄りのなかには、どうしてもおはらいだとか、おきよめなどをしてもらわないと満足できないものもいるだらう。そのたたりといふのは、ばいきんや毒によざれていることではなくて、神様に怒りをうけるような悪で、けがれでいるということだ。洗つて落ちるよ

うなよ。これではなく、儀式できよめられる、けがれなのだ。ことはの使い方のちがいが、君にわかるだろうか。ぼくたちのおじいさん、おばあさんでも、こうしたたりのことを信じているものがあつたから、何百年も何千年もの昔の人たちが、ほとんど全部、こんな考え方をしていたとしても不思議はないだろう。

君はときどき、自動車の中にお守りぶくろがぶらさがっているを見たことがあるだろう。あのお守りぶくろのおかげで、自動車の事故がなくなるとは思うまい。事故を起さないためには、注意深く、おたがいにルールをまもつて運転することが、いちばんたいせつだ。しかし、あのお守りぶくろとおなじものを、ぼくたちの小さいときは、よく首からさげさせられたものだ。お守りの中にはいつているおふだの神様が、ぼくたちを守ってくれているのだと、年寄りから聞かされた。

昔の人たちは、自分たちには、自分たちを守っているとくべつな神様がいると想えていたのだ。お守りなどという習慣も、その考えの残りだといえる。ときには、あるとくべつな動物のすがたに、神様がすがたを変えていると考えた場合があるらしい。そして、その動物が、自分たち一族の守り神として尊ばれた。それがトーテムと呼ばれているものだ。アメリカ・インディアンのトーテムポールなどを、君たちは写真で見たことがあるだろう。あのトーテムは、それぞれの部族でちがっているけれど、その部族にとつては、そうしたたいせつなものだつたのだ。日本には、アメリカ・インディアンのような形で、トーテムは残っていないけれども、それでもあるとくべつの動物が、神聖な動物として、殺すとばちがあたると考えられている。キツネだとか、タヌキだとか、シカだとか、いろいろとあるだろう。

こうした守り神のようなものとはべつに、タブーというのもも考えられていた。それは、ある事柄だとか、物だとか、人間などで、神聖で、さわってはならないものにきめられていたのだった。さわったら罰があたえられると、人間がおそれていたのだ。このタブーには、神聖だから、さわってはならないものと、その反対に、けがれているから、さわってはならないときめられていたものがあつた。

こうしたトーテムとかタブーは、いまでも未開の原始人の生活に残つていて、それが研究され、ぼくたちの祖先たちの考えの中にも、似たような考え方があつたことがたしかめられた。

守り神が自分たちにいふと考へるのなら、ほかの連中にも、彼らの守り神がいる。その敵の守り神が、自分たちにとつては、悪いことを起こすにちがいないと考へるのも当然だ。また、人間に不幸や災難が起きる。すると、いい神様に悪い神様、つまり悪魔だとか、悪靈だとかがいると、考えなければならなくなる。

タブーの場合にも、その考へは、いろんな形になつていた。ある人間が、神聖でさわつてはいけないのなら、人間に二種類を作ることになる。神聖な人間から見れば、ふつうの人間は、神聖さをけがす人間だ。こうなると、ふつうの人間よりもけがれた人間を作りだすようになる道すじもわかるだろう。王様とか、お坊さんのような人たちが神聖でさわつてはならないのなら、不可触賤民のような、けがれていさわつてはならない人間が考えられるのも当然だった。

いま、君は、こうした人間の差別をケシカラヌものと考へることができる。しかし、それがどうしてかわからないと、ぼくたちのいまの世界にもある、人間の差別をなくすことはできないだろう。（三九八八字、表現を変更した部分、及び省略した部分がある）

などいなだ『心の底をのぞいたら』（ちくま文庫、一九九一〔一九七一〕年に
よる